

## 霜月、師走に観たい北斎の「富嶽三十六景」と俳句



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ejiri\\_in\\_the\\_Suruga\\_province.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ejiri_in_the_Suruga_province.jpg)

富嶽三十六景 駿州江尻 (すんしゅうえじり)

めぐりくる季節に合う名画と俳句、今年は葛飾北斎（かつしかほくさい）（1760～1849）の代表作で、日本美術の歴史を語る上で欠かすことのできない傑作として、国内外の人々に広く愛されている「富嶽三十六景」を紹介しています。  
今回はその六回目として霜月、師走に観たい作品と俳句です。

19世紀後半のヨーロッパ芸術界を席卷した「ジャポニズム」。  
その火付け役となったのは、日本からフランスに輸出された陶磁器を包む緩衝材として使われていた「北斎漫画」だと伝えられています。  
これがある芸術家の目にとまり、そのデザイン力と多くのモチーフをいくつものパターンで表現する発想力に驚き、それがきっかけで、北斎や広重を筆頭とする日本の浮世絵など彼らの芸術作品が注目を集め、瞬く間にヨーロッパ中に広がって行きました。

フィンセント・ファン・ゴッホ、エドゥアール・マネ、エドガー・ドガをはじめ印象派の名画家たちが心酔し、天才ガラス工芸家エミール・ガレなど工芸の世界で活躍する芸術家たちも北斎や広重の作品の影響を色濃く受けました。

2020年、日本のパスポートが28年ぶりにリニューアルされ、査証ページの背景に「富嶽三十六景」の作品が敷かれるようになりました。  
また、今年七月に発行された新千円札の裏面に「神奈川沖浪裏」が採用されています。  
まさに今、注目されている「富嶽三十六景」のうち霜月、師走に観たい作品と俳句をお楽しみ下さい。



# 1. 富嶽三十六景 十八 駿州江尻 (すんしゅうえじり)



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ejiri\\_in\\_the\\_Suruga\\_province.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ejiri_in_the_Suruga_province.jpg)

東海道十八番目の宿場である江尻は、現在の静岡県清水区に位置します。  
江尻宿のすぐ南には清水湊があり、江戸への物資を運ぶ輸送の要衝として栄えていました。

しかし、北斎は宿場の賑わいではなく、あたり一面に葦が生い茂り、鄙（ひな）びた小さな祠（ほこら）が祀られられた寂しげな景色を描いています。

では、北斎はこの絵で何を描きたかったのでしょうか。

それは「風」という形のない自然現象です。

葦の生い茂る土手道、富士嵐（ふじおろし）とおぼしき強い風が吹き荒れています。  
旅人たちは、誰もが強風に耐えようと身を屈めています。運悪く菅笠（すががさ）を飛ばされた男がいたようで、あっと気づいたときには、菅笠は上空に舞ってしまっています。

また、画面右下の女性は、懐紙（かいし）を風にさらわれ、何十枚もの懐紙はまるで菅笠を追いかけるかのように、画面左下から右上へと対角線上に飛んでいます。

大きな樹も、葉っぱが吹き飛ばされ、幹までしなっています。

その一方で、背後の富士は墨絵のように稜線のみで描かれていて、まるで下界の強風は、微塵とも感じていないような様子です。

「神奈川沖浪裏」では「波」という一瞬で形を変えるものを描き、この「駿州江尻」では「風」という形をともしなわれないモチーフに挑んでいます。

まるで高速シャッターを切るカメラのような北斎の観察眼は、空を舞う懐紙一枚一枚を異なる表情でとらえ、風の動きを見事に表現しています。

折り返す土手道の曲線と横方向に和紙の地を残した地面、そしてこれらと霞を一体化させた構成も、風の動きや勢いを演出しています。

ここでは、富士山から吹き下ろしてくる冷たい風である、三冬の季語「富士嵐（ふじおろし）」を詠んだ句を選びました。

## 門飾吹きゆがめたる富士嵐

高浜虚子

富士嵐まともに苧田鴉（かりたからす）かな

石塚友二



2. 富嶽三十六景 三十八  
從千住花街眺望ノ不二  
(せんじゅはなまちよりちょうぼうのふじ)



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nakahara\\_in\\_the\\_Sagami\\_province.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nakahara_in_the_Sagami_province.jpg)

千住宿は日光街道および奥州街道の最初の宿場町です、絵の題名は「千住花街より眺望した富士山」の意味です。

絵の手前を行く人々は、南部藩と思われる参勤交代の大名行列で、これから国許（くにもと）へ帰るのだと思われます。

長持を運ぶ中間（ちゅうげん）、赤い附袋（つけぶくろ）で包んだ鉄砲を担ぐ鉄砲組、その後ろに続く槍組の毛槍が藁屋根越しに見えます。

右端の茶店には「千客万来」の看板と売り物の草鞋（わらじ）、休憩する旅人たちが描かれていて、画面中央には、あぜ道に腰掛けて、足を投げ出しくつろいだ農婦たち。

奥に花街、手前に大名行列。

これだけでは二つの対象はつながりませんが、対角線上にこの二つを結ぶ道と面白そうに行列を眺める二人の農婦を描くことで、物語性が生まれています。

千住の花街は「岡場所」と呼ばれ、飯盛女（めしもりおんな）の名目で遊女を置くことを許可された宿でした。

物々しい装いとは裏腹に男たちの様子はかなり肩の力が抜けているように見えます。

何人かの男は未練がましく花街の方に視線を送っています。

畦道で休む女たちと視線があったのか、バツが悪そうにしている男や、顔を背ける男。

想像を巡らせたくなるような日常の一コマです。

そんな様子を美しい富士と刈り入れ後の田んぼが見守っています。

ここでは、きめ細かく丁寧に描かれた刈り入れ後の田んぼに着目し、晩秋の季語である「苜田（かりた）」を詠んだ句を選びました。

待ちかねて雁の下りたる苜田かな

小林一茶

遠くにはとほき声あり苜田道

宇志やまと



3. 富嶽三十六景 四十五  
駿州大野新田 (すんしゅうおおのしんでん)



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hokusai31\\_ono-shinden.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hokusai31_ono-shinden.jpg)

駿州大野新田は、東海道十三番目の原宿（静岡県沼津市）と西隣の吉原宿（静岡県富士市）の間にあった新田集落です。  
現代も静岡県富士市大野新田という地名が残っています。

江戸時代、この一帯は浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯で、沼には男島と女島という二つの島が浮かび、富士見の名所として知られていたようです。

本図では、干した葦を背負った牛たちはのんびりと動き、その牛を曳く農夫たちも煙草（たばこ）を吸ったり、遠くの富士山を眺めたりと、全くせわしなさを感じさせません。  
また、左端には、背負子（しょいこ）を背負った農婦たちも腕を組んだりして、のんびりとした雰囲気漂っています。

背景の藍色のぼかしを施した空間が浮島（別名、富士沼）です。

沼からは鷺（さぎ）が五羽飛び立っています。

富士山の右、すなわち東側の雲だけが薄い赤茶色で摺られています。  
太陽の光が当たっていることを示しているのであれば、この図はまだ朝の早い時間とおもわれ、農夫たちは日の出前から作業し、いったん帰路についているのでしょう。

ここでは、本図に大きく描かれている「葦（蘆）」に注目しました。

葦（蘆）はイネ科の多年草で、日本には「葦原（あしはら）の国」という古称があるように、古くから葦が多く、北海道から沖縄まで広く分布しています。

葦の茎は、しなりがあり丈夫なため、枯れた後の茎は刈り取られ、葦簀（よしず）や簾（すだれ）などに活用されてきました。

ここでは、三冬の季語「枯蘆（かれあし）」「枯葦」を詠んだ句を選んでみました。

## 枯葦にひと日平らな空と水

桂 信子

## 蘆枯れてむしろ心の鮮（あた）しく

大牧 広



「駿州江尻」の富士風の「風」とは山から吹き下ろしてくる風のことです。

山の名を冠して、浅間風、赤城風、伊吹風、比叡風、六甲風などと呼ばれます。  
私も富士風から着想を得て、一句詠んでみました。

## ボルシチや六甲風の駅に下車

白井貴大

全体を通じての参考文献、出典：編者 日野原健司

『北斎 富嶽三十六景』(岩波書店) (2020年)  
ISBN978-4-00-335811-5

監修・著者 久保田巖

『北斎と廣重一美と技術の継承と革新』(リックテレコム) (2022年)  
ISBN978-4-86594-314-6

著者 奥田敦子

『THE 北斎 富嶽三十六景 ART BOX』(講談社) (2020年)  
ISBN978-4-06-519949-7

監修・著者 狩野博幸

『葛飾北斎名作 100 選』(宝島社) (2023年)  
ISBN978-4-299-04727-4

監修 永田生慈

『もっと知りたい葛飾北斎 生涯と作品 改訂版』(東京美術) (2022年)  
ISBN978-4-8087-1141-2 C0071

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社) (2008年)  
ISBN978-4-06-128972-7

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 春』(KADOKAWA) (2022年)  
ISBN978-4-04-400504-7 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 夏』(KADOKAWA) (2022年)  
ISBN978-4-04-400499-6 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 秋』(KADOKAWA) (2022年)  
ISBN978-4-04-400500-9 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 冬』(KADOKAWA) (2022年)  
ISBN978-4-04-400502-3 C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

一年間ご愛読いただいた「富嶽三十六景」シリーズ、今回で終了させていただきます。

新年からは、新しい趣向で掲載いたします。  
今後とも引き続きよろしくご愛読のほどお願い申し上げます。

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井貴大

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 [melmaga@tic-co.com](mailto:melmaga@tic-co.com) まで、  
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : <a href="mailto:info@tic-co.com">info@tic-co.com</a>
---